

第1章

添田町の景観資源



「木に囲まれた銅鳥居」 落合小学校5年 渡邊 旭 さん

第1章 添田町の景観資源

本町は、福岡県の東南端、福岡市と北九州市から約 40km 離れた場所に位置し、田川郡の最南端の町です。町域の北部は川崎町・大任町・赤村、東部はみやこ町、西部は嘉麻市、南部は東峰村、大分県日田市・中津市と接しており、東西 13 km、南北 16 km、総面積 132.20 km²を有しています。

町域の 8 割を森林が占めており、山間部には多様な動植物が生息する自然豊かな町で、町南部に位置し古くから信仰を集める霊峰英彦山を中心とする地域は、耶馬日田英彦山国定公園として、昭和 25 年（1950）に国内最初の国定公園に指定されています。



英彦山神宮参道



深倉狭



国指定重要文化財
中島家住宅



岩石山からの眺望



彦山川



国指定重要文化財
旧数山家住宅



フォレストアドベンチャー
添田



陣屋ダム

1. 自然環境からみた景観資源

1) 地形・水系

標高 1,199mの英彦山を主峰として、国指定天然記念物 鷹巣山や岳滅鬼山等の山々が南部に連なっており、これに直交するように幾つかのまとまった高地や丘陵地が広がり、北部の添田駅周辺に平地が広がっています。また、北部に位置する岩石山は、ところどころに巨岩が露出し地形が険しく、山頂から北西部に位置する田川盆地を望むことができるため、戦国時代には戦略上の要地として重要視されていました。

本町に流れる主要河川は、英彦山を源流としており本町中央を流れる彦山川と、東側を流れる今川、西南端の町境を源流とし西側を流れる中元寺川があります。

町内には洪水調整やかんがいを目的としたダムが2つあり、1つは今川の上流部にある油木ダム、もう1つは中元寺川の上流部の陣屋ダムで、いずれも 1970 年代に完成したものです。



図 1-1 添田町地形図 【出典：国土地理院】

2) 気候

添田の年間の平均気温は 15～16℃程度であり、年間降水量は 1,700～3,000mm 程度となっています。冬期は最低気温が氷点下まで下がる地域もあり、山間部を中心に多量の積雪に見舞われます。

※気象庁：観測点添田・英彦山における

平成 5 年(1993)～令和 4 年(2022)までの平均値



冬の四王寺の滝

3) 植生

本町は添田駅周辺の平野部と英彦山山頂とでは 1,100m 以上の標高差があり、標高約 800m を境に大きく 2 つの植生帯に分類されます。

標高 800m 以下の山では、スギやヒノキ、スジダイ、暖温帯でも見られるコジイ、アラカシなどの照葉樹と、ヤマザクラ、ケヤキなどの夏緑樹との混合林が主に植生されています。標高 800m 以上の山麓では、冷温帯気候の影響により、ブナやミズナラ等の夏緑樹林が分布しています。特に英彦山は、霊峰として古くから自然が崇められ大切にされてきたことから、原生的な自然が残されているため、昭和 25 年(1950)に国定公園として指定され保全されており、県内の自然度の高い山域の 1 つと言えます。(図 1-2)

しかし、平成 3 年(1991)の台風により、英彦山神宮表参道沿いの「千本杉」が全滅し、またブナ林や天然ヒノキ林などが壊滅的な被害を受け、植生が大きく変化しましたが、英彦山神宮や自然保護団体により、ブナ林等の再生に取り組んでいます。

4) 動物

多くの植物が自生する英彦山を中心に、ほ乳類や鳥類、爬虫類、両生類、昆虫等、多くの動物が生息しています。

哺乳類としてはシカやイノシシが多く生息しており、近年ではアナグマや外来生物のアライグマも数多く確認されています。それらからの農作物への被害を防ぎ生活を守るため、景観面においては苦肉の策ではあるものの、町内の田畑には金網が張られています。

また、英彦山では、かつてクマタカの生息も確認されており、県の天然記念物であるブッポウソウは今でも鳴き声を響かせています。

図 1-2 添田町植生図

【出典：環境省、第 6-7 回植生調査
1/2.5 万(1999~2012/2013~)】



2. 歴史環境からみた景観資源

1) 沿革

本町は、明治22年(1889)の市制・町村制施行により、添伊田村、野田村、庄村の3つが合併し添田村となり、明治40年(1907)に中元寺村と合併、明治44年(1911)の町制施行により添田町となりました。明治22年(1889)に落合村、榎田村、彦山村が合併してできた彦山村と昭和17年(1942)に合併し、昭和30年(1955)に津野村と合併したことにより、現在の町域となっています。

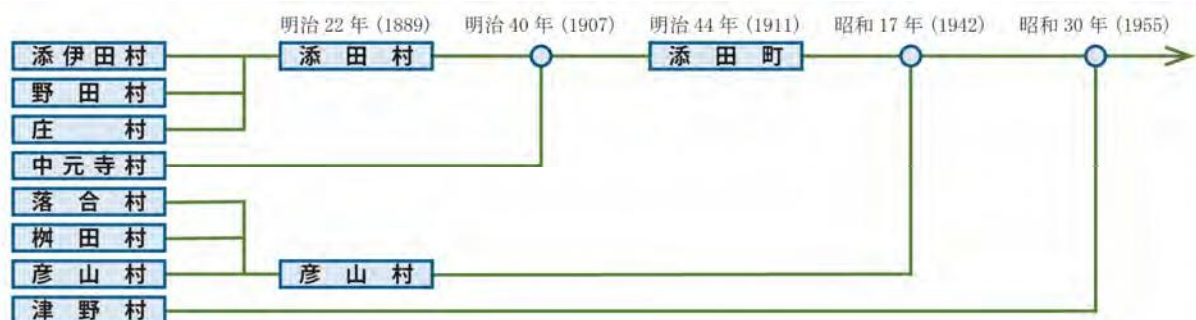


図 1-3 添田町の沿革

2) 添田町の歴史

本町では、英彦山山麓を中心として縄文時代の遺跡が複数確認されており、縄文時代以前から人々の生活が行われていたことを表しています。また、町北西部に位置する庄原遺跡からは、弥生時代の土器とともに、“青銅製のやりがんな”の鋳型が出土しています。これは、国内でも数例しか発見されておらず、古代東アジアとの文化的な交流を示す貴重な資料です。

戦国時代では、平清盛の命により築城され“豊前一の堅城”と謳われた「岩石城」が、豊臣秀吉による九州進攻で落城したことがその後の戦況に大きく影響を与えたと言われています。

江戸時代になると、修験道の霊場で知られる英彦山が九州一円の信仰を集め、大いに繁栄するとともに、小倉と日田を結ぶ街道沿いに位置する添田本町は、英彦山詣りなどの人々で賑わいました。

明治時代、国による近代化政策が始まると、国内有数の筑豊炭田で石炭採掘が活発となり本町にも多くの炭鉱が開鉱したことから、町内にも映画館や劇場などの娯楽施設も開業するなど、石炭産業の発展とともに近代化の礎が築かれました。

昭和以降、石炭から石油へのエネルギー革命により炭鉱閉山が進み、昭和44年(1969)には町内の鉱山は全て閉山となったものの、豊かな自然と清流により育まれた林業や水稻栽培、そして中元寺金ノ原台地での野菜や、近年ではハウスを活用した花き栽培も盛んとなり、国内最初の国定公園に選定された「耶馬日田英彦山国定公園」を中心とした雄大な自然と共に、先人たちによって大切に受け継がれた歴史・文化に触れ合える町となっています。

3) 添田町の文化財

本町には、国指定文化財 13 件、福岡県指定文化財 12 件、添田町指定文化財 6 件、合計 31 件の文化財が存在します。多くは英彦山信仰に係る有形文化財です。

表 1 添田町の文化財

類型		国指定	県指定	町指定	合計	類型	国指定	県指定	町指定	合計	
有形文化財	絵画					民俗文化財	有形民俗文化財		4	4	
	彫刻		1	1	2		無形民俗文化財	1		1	2
	工芸品	2	1		3	記念物	史跡	1	1	1	3
	書跡・典籍	1			1		名勝	1			1
	古文書						天然記念物	2	4	2	8
	考古資料	1			1	文化的景観					
	歴史資料					伝統的建造物群					
	建造物	4	1	1	6	合計	13	12	6	31	

(令和 5 年現在)

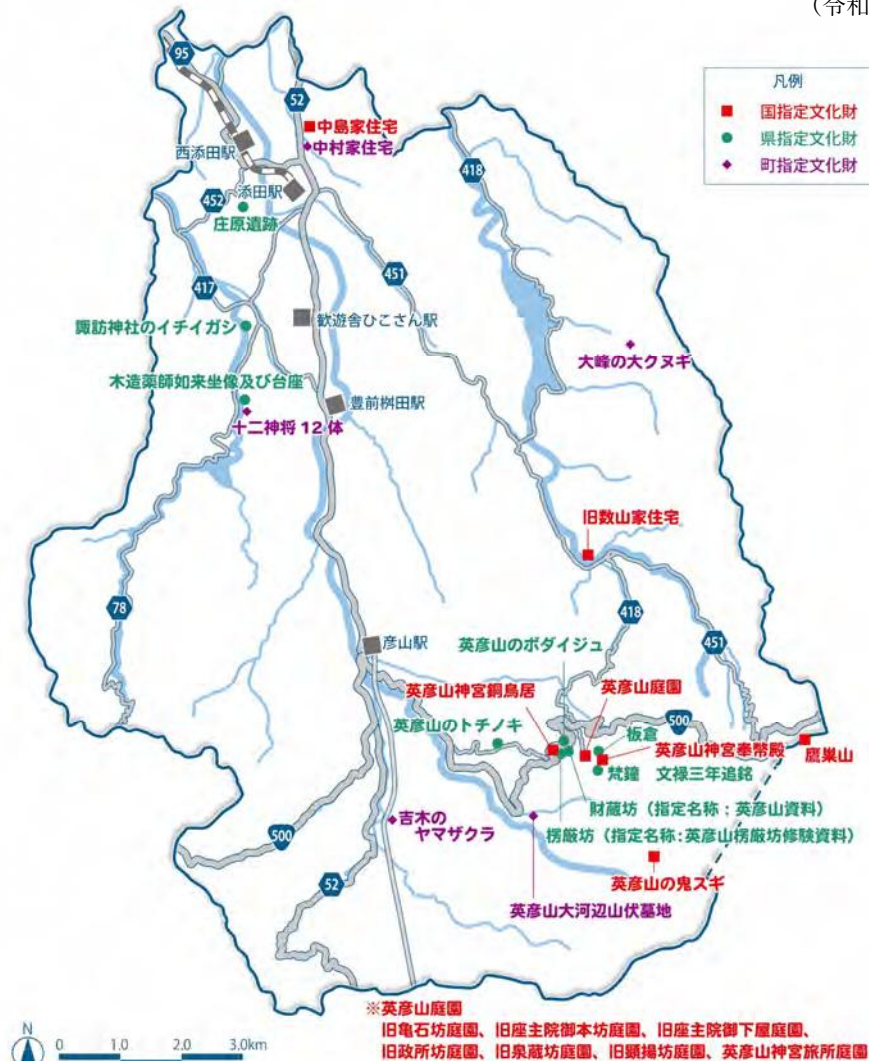


図 1-4 添田町の指定文化財の位置

3. 社会環境からみた景観資源

1) 人口

添田町の人口は、令和2年度時点で8,801人（男性4,128人、女性4,673人）、世帯数は3,724世帯。高齢化率は44.6%で、福岡県内では東峰村に次いで2番目に高く、また人口減少率は11.3%で、こちらも東峰村に次いで2番目に高くなっています。3-1（参照：福岡県令和2年国勢調査人口等基本集計結果、図1-5）

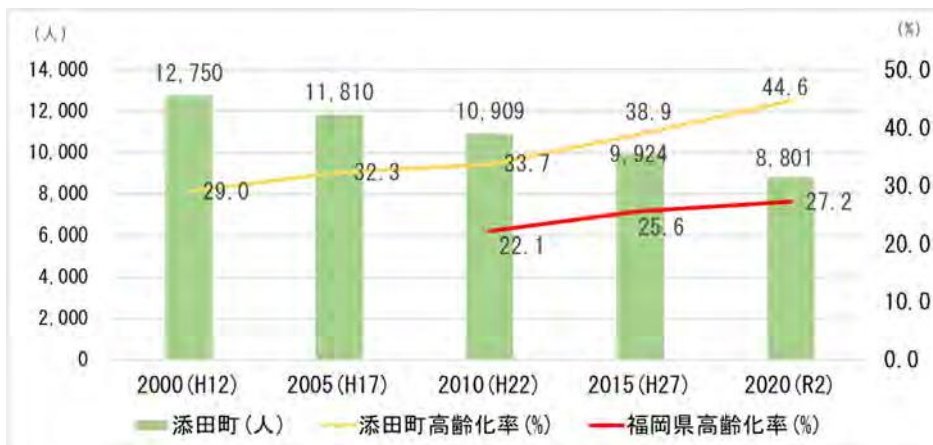


図 1-5 添田町の人口と高齢化率の推移【出典：国勢調査】

2) 土地利用

本町の土地は、84%が森林となっており、町域の大部分を占めています。農地は4%、宅地は2%、その他の道路や水路等が10%となっています。（参照：福岡県令和2年度土地利用動向調査、図1-6）

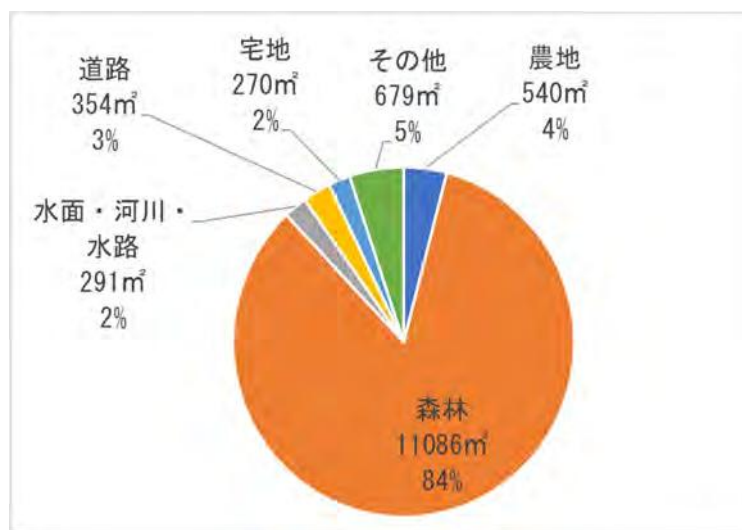


図 1-6 添田町土地利用の構成

3) 交通

本町は、北部以外の三方向が山に囲まれており、昔から他地域との交通のため峠道が発達しており、現在は、国道 500 号や県道 78 号、県道 451 号等が広域的な主要道路としての役割を担っています。

鉄道は、小倉駅から日田駅を結ぶ JR 日田彦山線が南北を縦断し、町内には 5 つの駅を有していましたが、平成 29 年(2017)7 月の九州北部豪雨により添田駅～夜明・日田駅間が被災しましたが、令和 5 年(2023)夏に BRT (バス高速輸送システム) の運行が開始されました。添田町内は添田駅～彦山駅間は一般道を走行、彦山駅からは BRT 専用道を走行します。

その他の公共交通機関はバスがあり、本町と田川市を結ぶ川崎町経由の西鉄バス筑豊株式会社の 1 路線の他、添田駅を中心としたコミュニティバスが巡回しており、学生や高齢者等の移動手段として利用されています。(図 1-7)

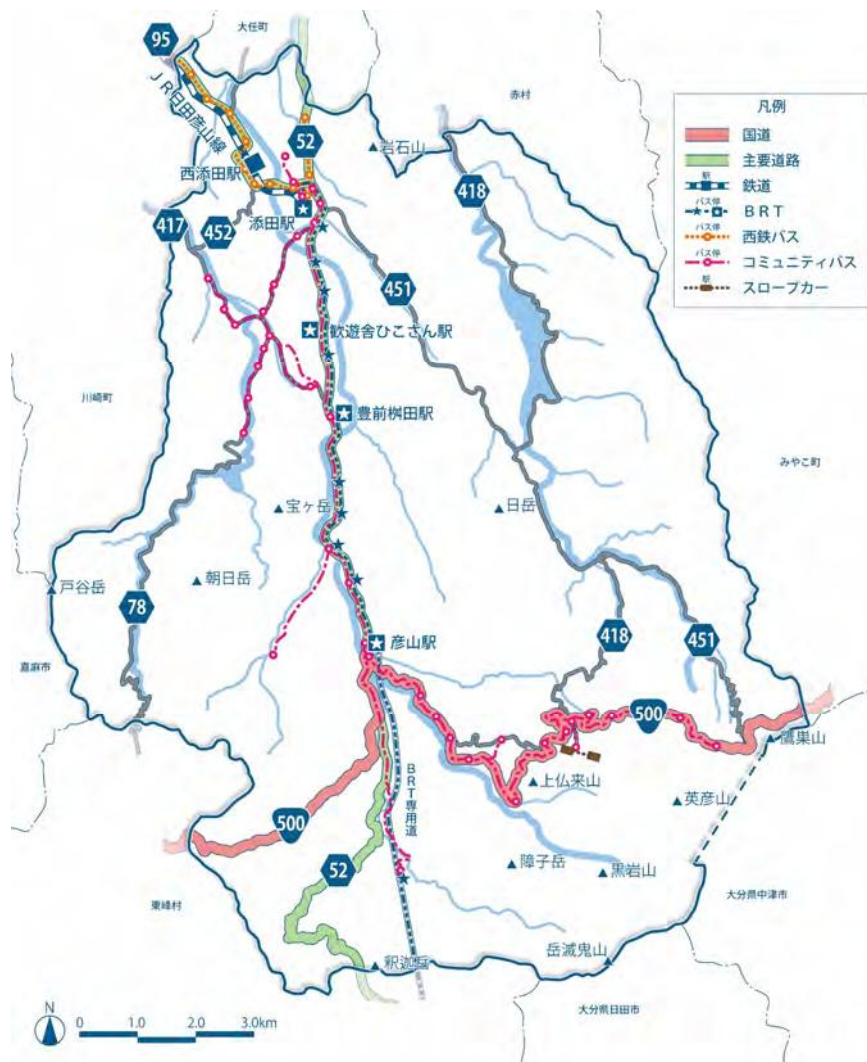


図 1-7 添田町の交通網

4) 観光

平成 17 年（2005）に英彦山参拝に便利なスロープカーが英彦山参道に整備され、観光入込客数が 1 年で 30 万人増加しましたが、その後は英彦山信仰離れと近隣市町村の観光地整備等の影響により平成 26 年（2014）には、約 88 万人に減少しています。しかし、その後は増加傾向にあり、令和 2 年（2020）に新型コロナウイルスの感染拡大によりやや落ち込んだものの、翌年から増加しています。（図 1-8）

添田町観光戦略による調査では、英彦山への来訪者が最も訪れるのは、英彦山神宮奉幣殿であり、次いで上宮（中岳山頂）となっており、景観・自然、登山・トレッキングが英彦山の魅力として評価されています。

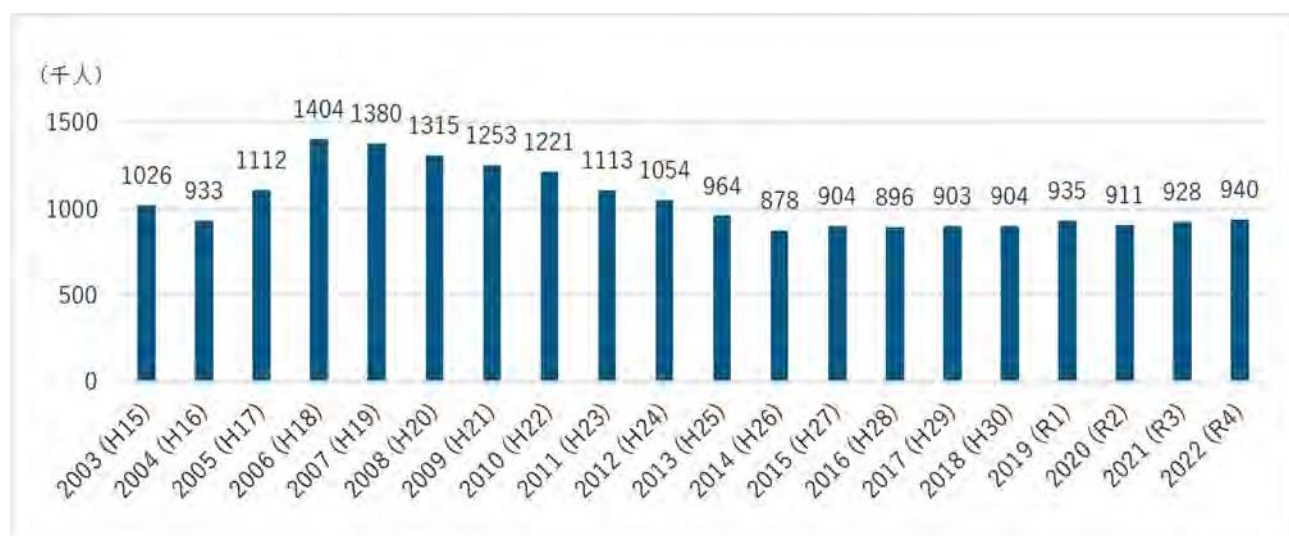


図 1-8 添田町の観光入込客数の推移【出典：福岡県観光入込客調査】

4. 町民・来訪者からみた景観資源

1) 景観に関する意識・現状

本計画の策定にあたり、町民アンケート調査、町内まちづくり関連団体ヒアリングを行いました。町民アンケートは18歳以上の町民の中から無作為抽出のアンケートを実施し、332人の方より回答をいただきました。

また、添田町森林組合、添田町商工会など、町内で活動している6団体から、現在の活動内容や課題、景観まちづくりに対するお考えなどをヒアリングしました。

これらの結果から、添田町の景観に対する町民意識は、次のような傾向にあることが分かりました。

【町民アンケート調査・まちづくり関連団体ヒアリングより】

●多くの町民が「添田町には自慢できる景観がある」と考えています

添田町全体の景観に対して、アンケート回答者の約8割が「添田町には自慢できる景観がある」と回答しています。



●自然環境に関する景観が高く評価されています

「良い」と感じている添田町の景観として、季節感が感じられる自然や英彦山などの山並み、山からの眺望といった自然環境に関する景観が高く評価されています。



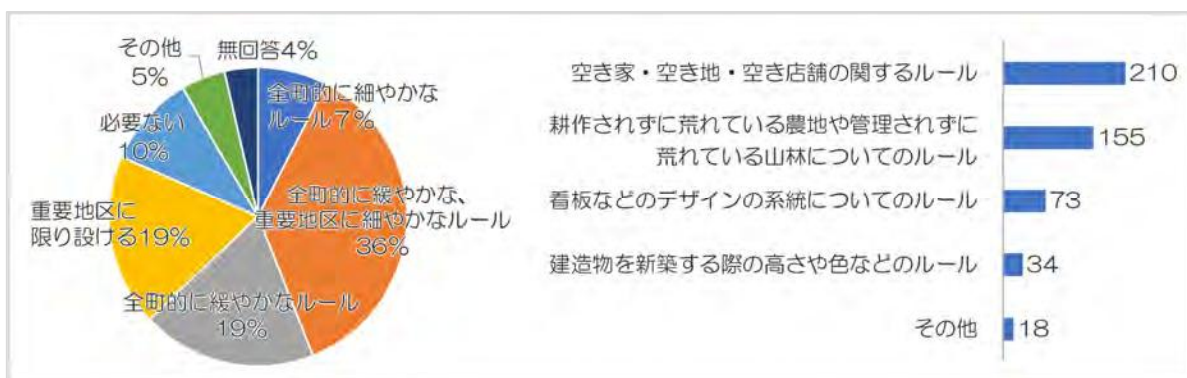
●活気のない街の雰囲気、管理が行き届かない生活環境の増大を懸念しています

「悪い」と感じている添田町の景観として、空き家・空き店舗、活気を感じられないまちなみ、耕作放棄地、管理の行き届いていない道路などが多く指摘されています。



●自然と歴史を核としたまちづくりを望まれています

景観まちづくりのルールとして、「全体的に緩やかなルールを設け、重要な地区についてきめ細やかなルールを設けた方がよい」が最も多く、回答者の85%が何らかのルールを設けた方がよいと考えています。町の魅力として挙げられる自然や歴史的景観を守り後世へと受け継いでいけるよう重点的に取り組む地域を設定し、メリハリのあるまちづくりが求められています。

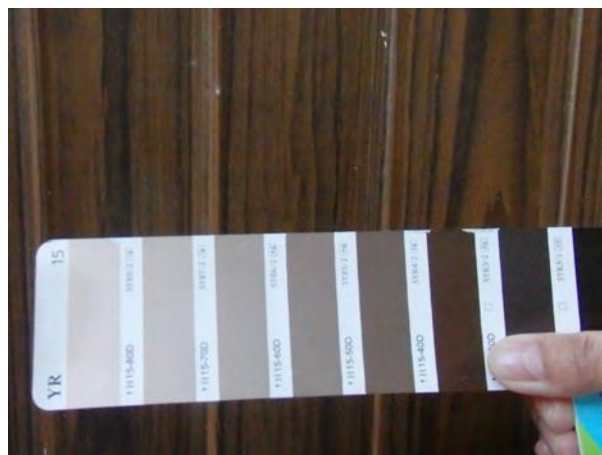


●景観まちづくりによる地域活性化が期待されています

「景観まちづくり」で、町の賑わいが回復されることが期待されています。

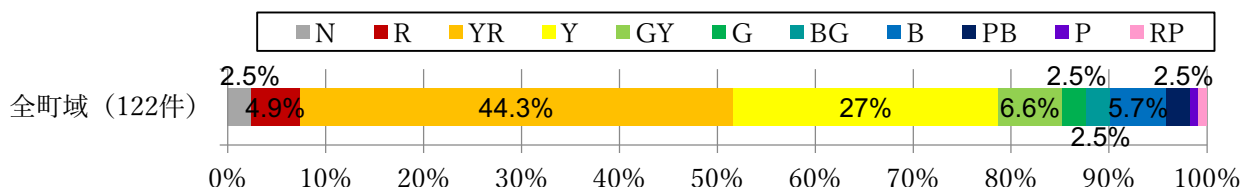
2) 色彩調査から見た添田町の景観

添田町全域の建築物等に対して、現況の色彩傾向を把握するための色彩調査を行いました。建築物の一般的傾向の把握のため、比較的新しい建築物の中から無作為に122件、主な観光資源の傾向把握のため、歴史的建造物等の景観要素を8件、計130件を視感測色法により調査しました。調査では、対象建築物の外壁・屋根の色彩の他、周辺の環境色彩（緑地など）についても適宜測色しました。



<調査結果>

添田町全体の建築物の色相は、暖色系が全体の7割強を占めています。特に外壁の色彩は、Y R（黄赤）が最も多く、次いでY（黄）が多いことが分かりました。建築物等の彩度については、YR(赤・黄)は6以下、R(赤)・Y(黄)は5以下、寒色系は2以下で、現状では調和のとれた色彩環境が保たれています。



英彦山周辺エリアでは、建築物の外壁は白色系か暖色系の中明度で、彩度は4以下が多く、黒色系の屋根色が多いことが分かりました。一方、中島家周辺エリアでは、建築物の外壁は明るめの暖色系の色調が多く、黒色系の屋根色が多いことがわかりました。全体的には、無彩色の屋根が多く、一部に鮮やかな屋根色が見られました。

●景観阻害要素を増やさないことが重要

添田町内には、景観阻害要素となる奇抜な色の建築物等はなく、色彩という観点では、英彦山由来の添田町の景色の基盤は損なわれていないことが分かりました。

樹木や山などの自然物は、中明度以下で彩度が低く、添田町は背景に自然物が見える場所や白色系の外壁色が多いため、中彩度以上の建築物は周囲から突出して見えます。周辺環境との調和に努め、高彩度色の使用を控えることが有効です。

3) フォトコンテスト応募作品からみた添田町の景観

添田町のフォトコンテストの入賞作品の場所や風景を分析することにより、守るべき添田町らしい風景の参考としました。平成8年(1996)から続いているフォトコンテストでは、町外からの応募も多数あり、町内外から見た添田町らしい景観が撮影されています。

受賞作品は、圧倒的に英彦山・深倉エリアの写真が多く、中でも英彦山神宮参道や高住神社の写真は多数入賞しています。英彦山神宮、高住神社、加茂神社等の写真からは、伝統的な祭りや神事の風景を映した歴史と人々の活気が感じられます。添田公園や深倉峡等の写真からは、桜や紅葉等の自然景観の美しさが映し出されています。



「秋の参道」 英彦山参道
佐藤 健介さん(北九州市)
第8回添田町フォトコンテスト推薦

「野田楽」 野田の加茂神社
三浦 誠さん(北九州市)
第16回添田町フォトコンテスト推薦



「夕闇に映える」 落合
松永 次男さん(嘉麻市)
第20回添田町フォトコンテスト特選



「仲よしクラス」 真木小学校5年 木下 慶さん